

政策論議における科学と政治

政策社会学史③ヴェーバー

上村 泰裕（名古屋大学）



Max Weber 1864.4.21.~1920.6.14.

Max Weber 1864.4.21.~1920.6.14.

社会学の始祖の一人。法学から経済学に転じ、フライブルク大学とハイデルベルク大学で教壇に立つが、重度の鬱病で休職。回復過程で『社会科学と社会政策にかかわる認識の「客観性」』と『プロテスタントイズムの倫理と資本主義の精神』を発表。前者は価値判断論争を巻き起こし、後者はマルクス流の唯物史観と対立した。人間行為を当事者の内面から解明しようとする理解社会学の方法を提唱し、経済社会学と宗教社会学の体系を展開した。

1 社会科学は政策論議にどう関わるべきか？

「どうすべきか」という価値判断を科学的に導き出すことができる、という考えが今でも一般に信じられている。しかし、われわれはそうした考えをとらない。理想をつきとめて、そこから処方箋を導き出すようなことは、経験科学の課題ではない。
(『社会科学と社会政策にかかわる認識の「客観性」』29頁)

しかし科学は、理想や価値判断を扱えないのではない。理想や価値判断の内容を科学的に批判することは可能である。人間の行為は、「目的」（何のために）と「手段」（どうやって）に分けて考えることができる。(30頁)

1 社会科学は政策論議にどう関わるべきか？

- ①科学は、その時々^の知識の範囲内で、目的にあった手段を見つけることができる。また、適当な手段が見つからない場合、その目的の非現実性を批判することができる。(31頁)
- ②科学は、ある手段にともなう「結果」を予想することができる。ただし、何を目的とし何を犠牲にすべきかを最後に決断するのは、科学ではなく人間の責任である。(31頁)
- ③科学は、ある目的の根底にある「理念」を解明することで、その目的の意義を論理的に明らかにし、当事者に自覚させることができる。(33頁)
- ④科学は、ある人の価値判断がどんな根拠に基づいているかを解明し、彼の価値判断が論理的に首尾一貫しているかどうかを検討することができる。(34頁)

1 社会科学は政策論議にどう関わるべきか？

「大多数のばあい、もくろまれた目的の追求はことごとく、この意味でなにかを犠牲にする、あるいは少なくとも犠牲にしているから、責任をもって行為する人間の自己省察で、目的と結果の相互秤量を避けて通れるようなものはない。」(32頁)

「経験科学は、なんぴとにも、なにをなすべきかを教えることはできず、ただ、かれがなにをなしているか、また——事情によっては——なにを意欲しているか、を教えられるにすぎない。」(35頁)

1 社会科学は政策論議にどう関わるべきか？

ある問題が政策的な性格をもつかどうかの目印は、次の点にある。つまり、目的を達成するための手段を考えるだけではすまないこと、問題が価値観を問う領域にふみこんでいるため、まさに判断基準となる価値そのものが争われざるを得ないことである。(39頁)

対立する意見を調停して妥協させることは政治家の手腕の一つであるが、科学における「客観性」とは何の関係もない。「中間派」は、左翼または右翼の極端な党派的理想に比して、髪の毛一筋ほども、科学的真理に近づいていない。」(42頁)

1 社会科学は政策論議にどう関わるべきか？

「認識と価値判断とを区別する能力、事実の真理を直視する科学の義務と、自分自身の理想を擁護する実践的義務とを〔双方を区別し、緊張関係に置きながら、ともに〕果たすこと。」(43頁)

混同がいけないのであって、価値判断がいけないのではない。
「志操のないことと科学的「客観性」との間には、なんの内的親和関係もない。」(48頁)

2 社会科学はそもそも客観的たりうるのか？

われわれが推進する社会科学は、「一方では、そうした現実をなす個々の現象の連関と文化意義とを、その今日の形態において、他方では、そうした現実が、歴史的にかくなくなって他とはならなかった根拠に遡って」理解することをめざす。(73頁)

人間精神は有限であり、現実世界は無限に多様である。それゆえ、科学的認識は「知るに値する」部分を取り出して分析するしかない。(74頁)

社会科学者は、重要なものと重要でないものとを区別することができなければならず、そうした区別を可能にする「観点」を所持していなければならない。(94頁)

2 社会科学はそもそも客観的たりうるのか？

何かを大切に思う価値理念や、何らかの文化内容の意義に対する信仰をもっていなければ、データを選ぶことも分析することもできない。価値が研究を方向づける。(95頁)

そうした意味で、社会科学的認識は「主観的」な前提と結びついている。にもかかわらず、それは科学的で客観的な因果認識である。(96頁)

何を研究すべきかを決めるのは、研究者および彼の時代を支配する価値理念である。そこから生じる観点が、当の研究者が使用する概念的補助手段の構成を決める。(99頁)

2 社会科学はそもそも客観的たりうるのか？

しかし、概念の使い方においては、思考のルールに従わなければならない。つまり、ここで「主観的」になってはいけない。
(100頁)

カントに帰りつつある現代の認識論に従うなら、概念を作ることとは目標ではなくて、むしろ経験的に与えられたものを精神的に支配する目的のための手段である。(149頁)

鋭い概念構成を怠って曖昧な言葉遣いをすると、政策論議は混乱と欺瞞に陥る。「国益」「改革」などの言葉のもとにひしめく多種多様な理念や利害に敏感であれ。(151頁)

2 社会科学はそもそも客観的たりうるのか？

科学がわれわれに与えてくれるものは、現実そのものではなく、現実の模写でもなく、ただ現実を思考によって妥当な仕方で秩序づける概念と判断である。(158頁)

社会科学の認識においては、主観的な価値理念から出発した認識が、現実の一部を客観的に照らし出しつつも、出発点の価値理念の正しさを証明したりはしない。(159頁)

このように、ある種の信仰から出発しつつも、その信仰自体を科学的に証明しようなどとは考えないからこそ、社会科学の認識の客観性を保つことができるのである。(159頁)

3 近代社会の発展はどこへ行き着くのか？

フランクリンの言葉「時間は貨幣だということを忘れてはいけない。一日の労働で一〇シリング儲けられるのに、外出したり、室内で怠けていて半日を過ごすとするれば、娯楽や懶惰のためにはたとえ六ペンスしか支払っていないとしても、それを勘定に入れるだけではいけない。ほんとうは、そのほかに五シリングの貨幣を支払っているか、むしろ捨てているのだ。」

(『プロテスタンティズムの倫理と資本主義の精神』40頁)

3 近代社会の発展はどこへ行き着くのか？

「人は「生まれながらに」できるだけ多くの貨幣を得ようと願うものではなくて、むしろ簡素に生活する。つまり、習慣としてきた生活をつづけ、それに必要なものを手に入れることだけを願うにすぎない。近代資本主義が、人間労働の集約度を高めることによってその「生産性」を引き上げるという仕事を始めたとき、到る所でこのうえもなく頑強に妨害しつづけたのは、資本主義以前の経済労働のこうした基調だった。」

(『プロ倫』65頁)

3 近代社会の発展はどこへ行き着くのか？

「プロテスタンティズムの世俗内的禁欲は、所有物の無頓着な享楽に全力をあげて反対し、消費を、とりわけ奢侈的な消費を圧殺した。その反面、この禁欲は心理的効果として財の獲得を伝統主義的倫理の障害から解き放った。利潤の追求を合法化したばかりでなく、それを…まさしく神の意志に添うものと考えて、そうした伝統主義の桎梏を破砕してしまったのだ。」

(『プロ倫』342頁)

3 近代社会の発展はどこへ行き着くのか？

「ピュウリタンは天職人たらんと欲した——われわれは天職人たらざるをえない。…この秩序界〔資本主義〕は現在、圧倒的な力をもって、その機構に入りこんでくる一切の諸個人——直接経済的営利にたずさわる人々だけではなく——の生活のスタイルを決定しているし、おそらく将来も、化石化した燃料の最後の一片が燃えつきるまで決定しつづけるだろう。」

(『プロ倫』364頁)

3 近代社会の発展はどこへ行き着くのか？

「今日では、次のように言わねばなるまい。国家とは、ある一定の領域の内部で…正当な物理的暴力行使の独占を（実効的に）要求する人間共同体である、と。国家以外のすべての団体や個人に対しては、国家の側で許容した範囲内では、物理的暴力行使の権利が認められないということ、つまり国家が暴力行使への「権利」の唯一の源泉とみなされているということ、これは確かに現代に特有な現象である。」

(ヴェーバー『職業としての政治』[1919年の講演]9頁)

3 近代社会の発展はどこへ行き着くのか？

「近代国家の発展は、君主の側で、自分と肩を並べている行政権力の自立的で「私的な」担い手に対する収奪が準備されるにつれて、どこでも活発化してきた。この場合の「私的な」担い手とは、行政手段、戦争遂行手段、財政運営手段その他の政治的に利用できるあらゆる種類の物財を、自分の権利として所有している者のことである。この全過程は、独立生産者層が徐々に収奪されていって、資本制経営が発展してくる過程と完全に併行している。」(『政治』17頁)

3 近代社会の発展はどこへ行き着くのか？

「今のところは、国家政策的官僚群と…私経済的官僚群は別々の団体として併立し、それゆえ政治権力によって経済的権力をともかくも制することができるのですが、やがて二つの官僚層は連帯的利害をもった単一団体となり、もはやどうしても統制できなくなるであります。」

(ウェーバー『社会主義』[1918年の講演]52頁)

3 近代社会の発展はどこへ行き着くのか？

「公経営および目的団体による経営において優位を占めるのは労働者ではなく、いよいよもって、またもっぱらただ、官僚にほかならないのです。ここでは、労働者は、私的企業家に対する場合よりも、ストライキに訴えることがいくらかむずかしいのであります。労働者の独裁ではなしに、官僚の独裁こそは、——おそらくさしあたり——進行しつつあるものにほかなりません。」（『社会主義』64頁）

3 近代社会の発展はどこへ行き着くのか？

「ところでぎりぎりのところ道は二つしかない。「マシーン」を伴う指導者民主制を選ぶか、それとも指導者なき民主制、つまり天職を欠き、指導者の本質をなす内的・カリスマ的資質を持たぬ「職業政治家」の支配を選ぶかである。そして後者は、党内反対派の立場からよく「派閥」支配と呼ばれるものである。」(『政治』74頁)

3 近代社会の発展はどこへ行き着くのか？

「政治とは、情熱と判断力の二つを駆使しながら、堅い板に力をこめてじわっじわっと穴をくり貫いていく作業である。…自分が世間に対して捧げようとするものに比べて、現実の世の中が——自分の立場からみて——どんなに愚かであり卑俗であっても、断じて挫けない人間。どんな事態に直面しても「それにもかかわらず！」と言い切る自信のある人間。そういう人間だけが政治への「天職」を持つ。」（『政治』105頁）

出典

- ▶ ヴェーバー『社会科学と社会政策にかかわる認識の「客観性」』（富永祐治・沢田浩・立野保男訳、岩波文庫、1998年〔原著1904年〕）
- ▶ ヴェーバー『職業としての政治』（脇圭平訳、岩波文庫、1980年〔原著1919年〕）
- ▶ ウェーバー『社会主義』（浜島朗訳、講談社学術文庫、1980年〔原著1918年〕）
- ▶ ウェーバー『プロテスタンティズムの倫理と資本主義の精神』（大塚久雄訳、岩波文庫、1989年）
- ▶ ヴェーバー『仕事としての学問・仕事としての政治』（野口雅弘訳、講談社学術文庫、2018年〔原著1919年〕）

参考

- ▶ 野口雅弘『マックス・ウェーバー——近代と格闘した思想家』（中公新書、2020年）